【論文 24】

迦絺那衣（*kaṭhina*）の研究

森　章司

はじめに

［1］本稿は【論文 23】「原始仏教聖典にみる釈尊と仏弟子たちの一日」に続く、その姉妹編ともいうべき「原始仏教聖典にみる釈尊と仏弟子たちの一年」を書きたいと考えて着手したものである。

「一日」もそうであったが「一年」も、筆者の中ではすでにイメージができ上がっていて、ホームページ（http://www.sakya-muni.jp/）の「現地調査報告など」のなかに掲載してある【文書 03】森章司「『シンポジウム　釈尊はどのような生活をされていたかーースマナサーラ長老とともに考える』基調報告（2002 年 12 月）」(1) においてもこれについてふれてある。

実はこれまでにもこの「モノグラフ」誌上において発表してきた、摩訶迦葉、マハーパジャーパティー・ゴータミーや提婆達多などの個人史とコーサンビーの仏教史などを執筆する際 (2) や、諸事が整わないのでいまだ内部文書に留まっているが、一昨年（2010 年）の 11 月に、それまで 17 年もの長きに亘ってこの「原始仏教聖典資料による釈尊伝の研究」の補助を続けてくださっていた中央学術研究所の補助が終了した時に、その成果報告とお礼の意味を兼ねて、『釈尊および釈尊教団史年表』と『釈尊年齢にしたがって配列した原始仏教聖典目録』（「第Ⅰ部　説時による目録」全４冊、「第Ⅱ部　回想・参考記事による目録」全１冊）を提出させていただいたのであるが、これらの基礎となる年代推定を行った際にも、これら１日の生活や１年の生活が、その基礎となっていたのである。

識者の中には原始仏教聖典に基づいて、このような具体的な年代が分かるはずはないとお考えになる方もおられるかもしれないので、その方法論を簡単に紹介しておこう。その基本は「モノグラフ」の第１号（1999 年７月）に掲載した【論文 1】「『原始仏教聖典資料による釈尊伝の研究』の目的と方法論」に書き、また具体的なことは【論文 23】にも書いたところであるが、より大きな視点からいうならば、われわれの研究は、

（1）情報を正確に読み取るための「基礎研究」

（2）年代記のメルクマールとなる「事績の年代研究」

（3）１つ１つの情報を年代記中に位置づけるための「釈尊教団形成史の研究」

（4）断片的な情報の背後を読み解くための「釈尊と仏弟子たちの生活パターン研究」

の４つを柱としているといってよい。

「基礎研究」というのは、仏伝経典を初めとする仏伝資料を網羅的に収集整理することはもちろん、釈尊時代のインドの暦法とか年齢の数え方、釈尊時代のインド人の就学・結婚などの平均（標準）年齢などの研究や、原始仏教聖典のすべてを対象として、１つ１つの経が「どこ」を舞台にして、そこに「誰」が登場し、釈尊や彼らが「何」をしたかの資料化など

であり、これらをもとに原始仏教聖典に記されているさまざまな情報を正確に読み取ろうとするものである。

また「事績の年代研究」というのは、祇園精舎の建設年とか提婆達多の破僧年など個々の事績の年代推定であり、また釈尊の一生の大枠を知るためのもっとも貴重な材料となるべき「釈尊の雨安居地」の研究などであって、これらは言うまでもなく釈尊や仏弟子たちの伝記の核となるべきものであるからである。

次の「釈尊教団形成史の研究」は、サンガの形成やサンガの運営方法を含む法体系は、例えば建物を建てる時には基礎を固め、土台を築き、柱と梁を立て、壁を作り、棟を通して屋根を葺くという具合に、順次に体系的に積み上がって初めて完成するものであり、釈尊の年代記をこのサンガの形成史や法体系の形成史と重ね合わせると合理的なものとなると考えて特に力を入れた。この総合研究が当初から、原始仏教聖典によって「釈尊の生涯」と「釈尊教団形成史」のイメージを再構築することを目指したのはこのためである(3)。

そして第４の柱が「釈尊と仏弟子たちの生活パターン研究」であって、これは上記のような研究によって明らかになった個々の事績の年代と年代をつなぎあわせ、例えば「釈尊はコーサンビーで雨安居を過ごされてから舎衛城に向けて出発された」といったさり気ない経典の記述の行間を埋めるための研究といってよいであろう。１日の積み重なりが１年になり、１年の積み重なりが一生となるのであって、したがって釈尊や仏弟子たちがどのような一日を送り、どのような一年を送ったかがわかれば、釈尊の一生や仏弟子たちの一生をリアルに想像することができるようになるからである。そのために今までに釈尊や仏弟子たちの遊行のあり方や、１日の移動距離を知る手掛かりとなる由旬（ヨージャナ）や、釈尊当時の社会状況を知るために漠然と「国」と訳されることの多い‘janapada’と‘raṭṭha’の研究などを行ったのであるが、今号の「モノグラフ」のテーマとしようとした「一日」と「一年」がまさしくこの研究を代表するものといってよい。

(1) このシンポジウムは日本テーラワーダ仏教協会のアルボムッレ・スマナサーラ長老を迎えて、中央学術研究所の主催により 2002 年 12 月 13 日に普門館・国際会議室において催された。

(2) 【論文８】摩訶迦葉（*Mahākassapa*）の研究（第９号　2004 年５月）、【論文 10】*Mahāpajāpatī Gotamī* の生涯と比丘尼サンガの形成（第 10 号　2005 年４月）、【論文 11】提婆達多（*Devadatta*）の研究（第 11 号　2006 年 10 月）、【論文 19】コーサンビーの仏教（第 14 号　2009 年５月）を参照されたい。

(3) 『モノグラフ』第１号（1999 年７月）p.002 参照

［2］しかしながら改めて作業をしてみると、釈尊や仏弟子たちの１年については、先の基調報告に書いたこと以上にあまりつけ足す必要がないことが分かった。そこで以前から今までの推論をより確かなものにするためには迦絺那衣を調査する必要性を感じていたので、テーマを切り替えて迦絺那衣を主題とすることにしたのである。お恥ずかしいことに筆者の中では、迦絺那衣のことはあまりよく理解できていなかったからである。

迦絺那衣は言うまでもなく雨安居を過ごした後に、布施された布で作る衣のことであって、これが主に記されているのは律蔵の「迦絺那衣犍度」である。しかし【1】の「問題の所在」で整理するように、迦絺那衣については今なお学界においても、各論はもちろん総論的なと

ころからしてよく分かっていないといってよいであろう。いやそれ以上に、調査をすればするほど渾沌としてきて、一時は漢訳律蔵の翻訳者たちもよく分からないまま翻訳したのではないかと疑いたくなるほどであった。それでも今はそれなりにすっきりとした理解ができていて、分かってみれば何だと思いたくもなるが、この結論のみを提出しても、あるいは本当にそうだろうかと疑念をもたれる方もありそうであるから、本稿では筆者の葛藤の経過をそのまま正直に提示させていただくことにした。律蔵の文章を紹介する時にはできるだけ簡潔にと考えたが、必ずしもそうはならなかったのは、読者諸賢にもぜひ律蔵の文章を検証していただき、ご意見やご批判をいただきたいからである。